

〔書評〕

小野久三著

青森県政治史(1) 明治前期編

稻葉克夫

(一)

六百頁にほんなんとするこの大著を読んで、私は次のことを思ひ出した。それは、かつて服部之總が、地方史研究者のすぐれた資格として、(一)その人が幼少からの体験の中に郷土史が生きてゐること、(二)その人が郷土を超脱した方法の上に立つということ(「福島自由民権運動史」高橋哲夫、序)の二条件を掲げていたことである。本書を二度、三度読み返すことに、私は服部氏の提言の正しさと小野氏が、まさに県政史の沃土に歟をいれるパイオニアとして適役であつたことを知らされるのである。

小野氏は周知の如く、長年、東奥日報社の論説委員長として活躍され、かたわら、名著「青森県農地改革史」をはじめ、「青森県市町村合併史」、「県労働運動史」を編纂し、現在は八戸図書館長として八戸市史の作成にとりかかつており、専門の史家ではないが、むしろ全体の構想においてすぐれた歴史哲学をもっている、いうならば文明批評家である。

従つて、その個性のある県政治史の構成の仕方は読者をして奇異の念を抱かざしめる。多くの書評者がいうところの、中央の政治情勢に頁が多くさかれ過ぎている面が生ずるゆえんである。つまり、本書はパイオニア的功績に輝く反面、それゆえの問題も含むものである。

確かに一地方史の構成としては、戊辰戦争や維新政府の内情、そして西南戦争、国会開設運動の中央政治史的側面に費した頁数は多い。その部分を圧縮して、その分だけ特殊史たる県史にふりむけたらよいと思うのも一理ある考え方である。

しかし、私はこの書をそのような面で批判するのは小野氏の真意を、また本書の真価を把握していないことであると思う。類書のレベルを越え、現代的意義を高度に持つ県政史を編み出す以上、それなりの著者の意図を、さらには従来の県史の欠くところを我々は知っていないければならない。

東大卒業後、青森師範に勤め、平凡社に勤め、東京都に勤め、内閣に勤め、そして東奥日報に勤めた氏の青森

県報は大きな座標軸をもっているといえよう。従つて本書の真価も、その歴史事象の記述が単に一青森県段階に終つていない点にこそある。日本全史の中と深みの中で、青森県という東奥の小県がその時々々の歴史の中で占めた位置を座標点のように確定してくれる。一地方県の近代の歩みを、近代日本形成という有機的組織、視角の中でとらえている。地方を孤立化、特殊化させず、また中央の歴史に埋没させずに、大いなる視野でとらえている。この態度は、百四十万県民の本鐸たる民方ならではの史心、史眼のしからしむるものである。

私はこの書の紹介と批評するにあつてその紙面にあつたところの記述だけに終らず、著者の意図と青森県の歴史を書いた類書の中における本書の意義と価値、さらに個々の史実の向題を互に関連させながら論じたいと思う。しかし、史眼、史心ともに著者にはるかに反ばざる者ゆえ、有評敢て諒とされたい。

(二)

才一編、過渡期の激動と東北は二章十一節からなり、鳥羽伏見の戦から、五稜郭陥落までの維新戦争の戦火の北上と、それにまぎこまれた東北、北越諸藩の動きの鳥瞰である。

近代の青森県は、確かにこの歴史過程の中から誕生したのであり、それだけにこの記述は重要な所である。著

者の麗筆はよくこの混乱する事象を手ざわよく整理して読みさせる。なお全体として、東北諸藩の維新へのたずさわりの方を、ほとんど勤皇派、佐幕派、それに対薩長勢力に対する反応の仕方でも分析しているが、もっと東北諸藩が内包している苦悩、向題点、さらに指導的人物や民衆の動きなどタイナミックにとらえ、その上に弘前、八戸、盛岡の特色を浮き彫りに出してほしかった。

かくすると、戊辰戦争の戦争性格と青森県とのかか合いの意味が明確化し、フルシヨア対封建勢力とみる眼部の総説と封建勢力面の再編成とある盧蔭進之助説に決着がつくと思う。つまり、少くとも青森県では盧蔭説的意味をもつたといえるのではなからうか。

才二編の明治新政と最後の藩政は、事の性質上、やや制度史的色彩が濃かつた。しかし、この廃藩置県の前夜は、封建勢力がその性格を露呈したドラマチックな時期なのである。後述になつてゐる津軽藩の十町歩以上の土地の取りあげ事件などはその典型である。この向題は単に政策としてではなく、思想的にとりあげればまた別のおもむきがあつただろう。この編では、新政府の成立過程を機構と公儀精神の点からとらえているが、弘前、黒石、八戸の代表の活躍がある程度わかつたことは收穫だった。三藩の代表の意見の相違は興味のあるところである。

また著者は封建制度のムラスの面として、人材が地方

で育成される点をあげているが、この点は現代を考へる上でも重要な指摘である。なお上野の高山彦九郎、長岡の吉田松陰の東北東遊を考へる際、並に弘前藩や八戸藩から西南日本へ遊正に行った人物がなかり匠のかどうかという思いが湧いてくる。それは武士だけに限らないし、政治面だけのこともない。西廻り航路などは人物や文化ではいかように活用されたであろうか。斗南藩人士の動きから一しおこのようなことが考へさせられた。

才三編は青森県の成立と諸改革で百十頁を費している。主体は廃藩置県による近代行政県としての青森県の誕生である。この際、廃藩置県に際して一家言をもっているといわれる杉山竜江の見解を紹介してほしかった。杉山は板垣とも親しく、自由民権派の黒幕的存在でもあるので研究に値する人物である。また八戸藩の近藤正喜の藩政改革論は既に「奥南史苑」などに紹介されているのであるから当然このあたりで触れてよいのではなからうか。県方の青森移転については、充分力が入れられており、説得力もあつた。なお新しく編成された地方行政区域については、資料をあけたのみであるが、当時の県民生活を知る最も有効な資料なのであるから、もっと活用して県民生活を復元してほしかった。

新政府の文明開化政策の最たるものは等制發布である。本県の場合、東奥義塾と斗南藩士の功績が重点的にあけられるには誰も異存がなからう。しかし、この義務教

育が庶民の生活の中にどういう具合にとけこんでいったか、受け入れられたか、負担はどうであつたか、各地の師範学校や郡立中学校はどのようなものであつたかについては、前野叔授の手も及んでいなかったところであり、今後に残された課題であらう。この点は「青森県師範学校記念誌」などにその実態の一部が紹介されているのは参考に存らう。

士族の没落は支配者内部の骨髄に融れる問題だけに、確かに明治初年の重要問題であらう。本書の記述にも力がこもっている。しかし、その要因である徴兵令については、奇兵隊から始まる国民皆兵への道を制度史的に、また一般論的に論じて本県の実態についての印象が薄い。また本県の士族の生活について、中等の地位にあり、特に八戸の如きは、全国無比の富豪の士族」と評価されたということにたいしては、県民全体の立場からさらに考察すべきであらう。士族対策の問題は弘前、黒石、八戸、七戸、盛岡、斗南とそれぞれ条件が違つてゐるし、士族と農工商という一般県民との関係も大切である。

ともあれ、士族の新時代にたいする貢献度は民衆の渾れた本県である程に大きいのは著者の及ぶ如くである。県内の地方自治、教育、りんご産業はいうに及ばず、さらに北海道へ渡つたもの、上京したものの活動も大なるものがあつたといえよう。この点はもっと具体的に叙述してほしかった。

地租改正の資本主義発達史上における意義は、今更、改めて説くまでもないが、本書は才三編廿五章でこの問題について、総合的に、しかも非常に鋭い問題意識のもとに解明している。地租改正の結果は青森県の農村に絶大な影響を与えたものであり、その貧困さと背中あわせのものでありながら、これまでの郷土史では全く触れることのないところである。

現今、行われている固有林解放運動の源もこれに発し、またこの苦しみでまぎとった問題意識を活用せずして問題と取り組むならば、またしてもその結果の利益は一部のものに独占されて、農村の構造改善に役立つことは少ないであらう。

特に明治政権の地租改正事業が、県下一斉に行われたのでなく、県南地方と津軽地方を分け、しかも抵抗の少ない下北、上北両郡を最初に手がけたという、津軽、南部対立の県民感情や両地方の利害関係の背景によって分裂させ、支配を貫徹させていった巧妙なやり方、それにうまく乗せられた県民の無知など本書によって判然と解明され、現在の我々にも憤りを覚えさせるものがある。

この一章はすばらしい、迫力のある章であるが、なお望蜀の願いをいうならば、田子町から五戸町にかけておこつた、地租改正反対の農民一揆の内幕が充分に紹介されていいことである。北村氏の三戸郡史から引用はされているが、その実態はなお不明なのである。直後の真

田太古事件ともからみ、さらに鹿角地方の農民運動や盛岡の自由民権運動などとの関連を調べれば、非常な中央権力に必死に抵抗した本県の農民のリアルな姿が浮き出てくるように思われる。

また、悪党、地主と一般農民との裁判沙汰も明治、大正期を通じて数多くあつたが、やはり紹介しておくべきであらう。かつては同じ青森県であつた岩手県三戸郡の小繋山の入会権問題は、裁判史上有名な事件であるが、その主役であつた小堀喜代とは三戸郡下で行商をしており、彼のような秀れたリーターを持つたため、むなしく泣き寝入りした例が多いのである。

才三編は明治初期の政治状況で中央政府の動向が主である。それだけにドラマチックで興趣もわく。徳富蘇峰の人物評価、史論によく接するが筆者の共感からだろう。か。西郷を中心にした人物の動きの図式化がよくなされているが、筆者自身の見解のほしいところである。また岩倉使節団が学んだものは世界史的情勢とにらみあわせることが必要である。清沢河の「文明の進歩と国力の増進」で結んでいるが、文明の進歩の実態、つまり帝國主義の段階に入りかけた西政をみたことは、その後の啓蒙的諸政策の手直しとなつてあらわれた点が重要である。

才三章の対アジア外交では征台の役を高く評価し、琉球の帰属が日本に確定したごくよく説明しているが、琉球

向題はアメリカの前大統領クランド將軍の手を借りるまで紛糾したのが正史的事実である。日本外交の強国向けと弱少国向けの二面相の解明を今少し突込んでほしいかつた。

また明治政府の外交のもたつきは、士族向題とからみあつた向題である。しかし才四章の士族の反乱ではぐぐ深く立ち入りすぎた感もある。

このことは僅か十年にして、昨日の官軍が賊軍となり、賊の会津が官軍となつて薩人を追撃する人争の變遷、極りなき更に環に端なきが如し、という言葉に著者の無限の感慨がこめられているからである。従つて普通の概説書では味わえない正史の体温がひたひたと読者の心をうるおすのである。西郷に対する評価も斬り捨て御免的なものでなく、よくわれ／＼の心情を納得させるのは単に筆力ばかりのせいではあるまい。

しかし、さらにいうならば、没落士族にたいするこれだけの思いが、維新から十年代までの農村社会に及んだならば、また扶養の文明開化の土着、活着になされるならば、本書は一層光彩を放つたであらうと思う。

才五編の明治前期の政治と青森県は本書の最も重要な、そして最も力を注いだ編であらう。全十章、二十八節、百三十頁は、まず、明治七年の民選議院設立連白書呈出から始まり、明治二十一年十二月、後藤象次郎の大同団

結運動で青森県の自由民権運動が一つの結節点をもち、その後世に残した最大の遺産である東奥日報の創刊をもつて終る。実に十四年間の、本書で扱う明治前期の三分の二を占めるところなのである。

ここでは、在来の地方史の段階では余り重視しない地右官會議をわざ／＼一節を設けて論じたのは、著者の自由民権運動にたいする存心／＼ならぬ意氣を感ぜざるものである。県令と県政の節では、長次官の確執、さらに県内の、津輕藩士團の進歩派、保守派の内紛を知つて、今に変わらない行政特例県政を知り、悲哀を感じる。たゞ、県政を論じて県政に融れることがないのはどういふことであるか。戦政のあり方こそ県政の要であるが、県政の要点に迫る最も有効な方法なのではあるまいか。しかし、比較的短い文章で各県令の特色がよくでていた。

神官僧侶区戸長會議はその性格づけからしてなお向題が残るが、その出席者と、さらに初期の県議會議員については、経証その他の説明がほしかつた。今となつてはその子孫が不明の人物も多からうが、分明了な限りの紹介でも理解を助け、今後の研究の資となることであらうと思う。

民権運動については、まず全国的段階で、そしてそれにたいする政府の対策、次いで東北地方の情勢へと筆を進めている。東北地方では福島県の河野広中について十

本書にわたって書かれている。河野にそれだけの偉大さを認めてあげたが、県内の人物についてそうあつてほしかつた。さうに盛岡の求我社との関係にも触れるべきであるうし、弘前のメソジスト派、八戸のキリシア正教派の伝導と県内の自由民権運動の関連をもっと深く追求すべきであらう。県内の自由民権主義者の思想内容についての分析も橋本（旧世原田）正信氏や吉田昌氏、そして私なども行なつて発表しているところであるからその行動とからめて触れてよかつたと思う。

本書のオ七章で県民の生活をとりにあけてあるが、これこそ最も基本的な分野である。著者はこの基盤の上に立つた政治運動という図式を設計しているのであるが、多少経緯的な側面をとりあけてはしなかつた。東北農民の苦しみを代表するものこそ東北の自由民権論者々といつてゐるが、青森県の場合は果してどうであつたか。橋本説（「青森県の自由民権運動——弘前地方を中心にして」弘大國史研究34号）では否定的であつたし、県南の産馬組合事件では「拳村拳家老若男女残リナク県庁へ推参シテ」（「日本馬政史」才五巻）運動したとあるからには、農民生活と直接にのつながつてゐたといえよう。ただし、馬組合の委員や馬籍係は殆ど豪農、豪商の代表、それに旧藩士であつて、イコール農民の総意でないことは勿論である。この点、県南の農村構造の複雑さは自由民権論者の運命を背負つていたのである。

こういう具合に県南と津輕の自由民権論の基盤は異質であつたのだが、それがどこで県下一本の運動をとりこむであらうか。本書の内容ではその点や、不鮮明である。私はその一つのケースを同人社に見出してゐる。それは建白書呈出の代表、中市福太郎は五戸の寒村の出身だが、義塾派の若き推進力である伴野雄七郎と共に中村敬守の同人社の線において結びつくのである。これは単なる偶然ではなからう。

旧藩のワケを越えたところから始めて近代的思想者と運動力が湧いてくることは著者の力説したところでもある。なお、本県の自由民権運動の脆弱性の原因に、義塾や青森師範の教師が多いというのにもあけられよう。教師と浪人的士族の集団では県民全体へのリーチ・アップに資格不足といへよう。このような問題はもっと個別研究の積り重ねが必要である。

県内の自由民権運動の成果はどこにあるかという向いにたいする答は余り明確でない。私は大同団結運動の隊の盛り上りがそれであると思う。さらに、オ一帝國議會で土佐派自由黨員のとなつた態度にあきたらないで、青森県自由党を結成したこともあけられると思う。

後藤象次郎の大同団結運動が県民に及ぼした影響の大きさはまさに著者の指摘する通りであらう。著者はこの運動を民権と団結の価値転倒の過渡期の現象とみているが、それだけに本県の思想界における大同団結運動の意

義は大きい。

特にこの運動の直接のきっかけになった条約改正問題については、本県人はなみ／＼ならぬ関心をもっており、中央における陸羯南の働きはよくにしても、大隈邸侵入の小山勝次郎事件、そして野田地の一商人、野坂久二郎氏所有の蔵書の中に、馬場辰猪の「条約改正論」や高橋五郎の「支除論」、高橋自侍の「内地雜言論」、稲垣満次郎の「対外策」、何礼之の「琉球事情——蛮地所屬」、さらに谷尾見書、鳥尾小弥太、中江兆民、黒田清隆、そして板垣退助りの書が数多くあつたといふことは、十年代から二十年代にかけての知識人の精神状況を示すものであり、大同団結運動を受けへれる一つの素地を示すものといえよう。

従つて無神経事件を大同団結運動の一つの発現とみることには正しいが、それは單なる名分論からの騒動ではなく、自由民権の洗礼をうけた、権利に覺醒した県民の自覺的行動とみてよいと思う。無神経事件で騒動をおこしたのは不平士族連ともいえようか、實態はなお深く究明しなければならぬと思う。二四年の地租増徴反対運動で幕下の地主たちが一斉に立ち上り、東北全体の連合までもつていき、遂に成功したのは、ひとえにこの時の経験がものを言つたと言えよう。以後、表面はとも角、県の政界を動かしていくのは地主層である。こういう点の明確化は才二巻になるであらうが、一つの展望がほしい

ところであらう。

(三)

色々と淺薄な知識でもつて、この畢生の大著におこがましく注文をつけ、批評をしてきたが、本書の真価はこれで見さゝかも傷つくものではない。私はむしろ同書の後輩として自戒の意味をこめて書いたといつた方が本音であらう。盲目的個別研究はそのまゝでは歴史の深まり、広まりとはならない。今回の「青森県政治史」はそのことを教えてくれる。

従つて、後を歩む我々は小野氏の大著に方向づけされながら研究を深めていかなければならない。石坂洋次郎が「われら津輕愛なり」(「ふるさとの唄」所収)で非難を蒙りで綴つた解里津輕に拒絶と抵抗の北境、しかもその底になお脈々と流れる郷愁の思ひ、限りない懐旧の情、さらに自らの創作心の拔を劣等感といわなければならぬ苦汁、克己の姿をみ、たとえその分野が違つても、ふるさとに對してはこのようなエトスが伴わなければならないことをまぎ／＼と知らされたのである。